台大日本語文研究第 28 期
2014 年 12 月，頁 63-84
2014-10-15 收稿，2014-11-24 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2014.28.63

由芥川龍之介的漢詩觀察他對中國的憧憬
－以中國旅遊前後之漢詩為主－

范淑文*

摘要

井芥川龍之介除了是小說家之外，還是一位漢學家、創作漢詩卻鮮爲人知，芥川的老師夏目漱石漢詩才華廣爲人知，留下 208 首漢詩集成漢詩集；而芥川之漢詩或許是因爲僅只附在給友人的信札中、受朋友之託題於畫作上，數量也不多之故，芥川漢詩的研究僅局限於少數研究學者。

芥川小說研究數量頗多，而漢詩方面僅有村田秀明、小室善弘、中國的邱雅芬、台灣的彭春陽等學者，這些芥川漢詩研究中，以日本文學研究之外同時在中國文學漢詩方面造詣也頗深的邱雅芬所做的研究最爲完整，她整理出現有的 34 首芥川漢詩，將之分類成第一期：1912~1915 年(第一高校在學時起至《羅生門》創作時期)、 第二期：1917~1919 年 (作家地位穩固，忙於撰稿時期)、第三期：(前期至中國旅行 1920 年前的短暫時期)、第四期：中國旅行之後的一長段時期。四期當中，第三期時期短，創作作品卻達 13 首，占整體的近百分之四十，而時期最久的第四期的創作數量僅只 4 首，占百分之十二弱，這個統計意義頗深。

本稿根據邱雅芬之分類，以中國旅遊前的第三期及之後的第四期所創作之漢詩爲研究素材，探討芥川之文人嗜好(繪畫)或對其他中國文化所持的關心、檢視其心境之改變，進而詮釋芥川之藝術觀。

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系教授

關鍵詞：芥川龍之介、中國旅遊、中國的憧憬、漢詩、藝術觀

臺灣大學學術期刊資料庫

From Akutagawa Ryunosuke's Chinese Poetry to his Longing for China: A study on Akutagawa's Chinese Poetry composed around his trip to China

Fan, Shu-wen*

Abstract

Akutagawa Ryunosuke is not only a writer, but also a classical Chinese scholar, yet his Chinese poetry is little known. Akutagawa's teacher, Natsume Soseki is well known for his flare in Chinese poetry, having composed 208 poems that was collected and published. In contrast, Akutagawa's Chinese poems are small in number, and only included in his letters to friends or written on paintings, thus few in the academic field focus on the study of Akutawa's Chinese poetry.

The amount of research conducted on Akutagawa's short stories is vast, yet only a few scholars, including Murata Hideaki, Komuro Yoshihiro, Qiu Ya-Fen (China), and Peng Chun-yang (Taiwan), focus their research on Akutagawa's Chinese poetry. Among them, Qiu Ya-Fen, with her attainments in both Japanese and Chinese literature, has conducted the most thorough study. She organized Akutagawa's 34 Chinese poems into First Period: 1912~1915 (First High School to "Rashomon"), Second Period: 1917~1919 (the period Akutagawa solidifies his status as a writer), Third Period: (a short period before his trip to China), and the Fourth Period: a long time after his trip to China. The Third Period is the shortest among these four, yet Akutagawa composed 13 Chinese poems in this time, which is almost 40% of the

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

Chinese poems he composed. In contrast, he only wrote 4 poems during the longest period (the Fourth), which accounts to less than 12% of his Chinese poems. This a very significant statistical difference.

In this paper, the writer would focus on Akutagawa's Third and Fourth Period poems (according to Qiu Ya-Fen's category), to discuss Akutagawa's literati interests (paintings) and his interests in China culture, examine his change of heart, and try to explain Akutagawa's artistic views.

Keywords: Akutagawa Ryunosuke, Chinese trip, Longing for China, Chinese poetry, Artistic views

臺灣大學學術期刊資料庫

芥川龍之介の漢詩からその中国憧憬をみる
—中国旅行前後の漢詩を中心に—

范淑文*

要旨

芥川龍之介が小説家であることは周知の事だが、漢学者の一面をも持ち、漢詩も創作していたことはあまり知られていない。その師である夏目漱石の方は漢詩集を彩る漢詩（208 首）における才能は広く知れ渡っているが、芥川の場合は恐らく友人などへの書簡に添えたり友人の依頼で画に題したりする程度の数の漢詩しか作っていなかったためであろうか、漢詩の研究はあまりなされていないのが事実である。

芥川の小説研究は膨大な量に上るが、一方、漢詩の方は村田秀明や中国の邱雅芬、台湾の彭春陽など研究者が大変限られている。それらの芥川の漢詩研究者のうち、中国文学や詩の研究者でもある邱雅芬が､現存している芥川の 34 首の漢詩を最も細かく研究していると言えよう。邱氏は芥川の漢詩を、第一期——1912 年～1915 年（第一高等学校在学中の時から「羅生門」創作までの間)､第二期——1917 年～1919 年の二年間（作家としての地位が確立され、小説創作に追われる日々）、第三期——中国旅行前の 1920 年までの短い期間の計 13 首、第四期——中国旅行以降の長い期間、計四首、との四期に分けている。この四つの時期のうち、最も期間が短い時期第三期が作品総数の 40%近くを占めており、一方、時間的には最も長い第 4 期は逆に 12%弱しかないという結果は意味深い。よって、本稿では氏の分類や解釈に従いながら、芥川の中国旅行前の第三期及びその後

* 台湾大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

の第四期漢詩に絞って、絵画的要素などの文人嗜好や中国文化への姿勢の変化を考察し、芥川の芸術観の理解にアプローチしてみる。

キーワード：芥川龍之介、中国旅行、中国憧憬、漢詩、芸術観

臺灣大學學術期刊資料庫

芥川龍之介の漢詩にその中国憧憬をみる
—中国旅行前後の漢詩を中心に—

范淑文

一、はじめに

台湾や中国大陸でも大変人気を集めている芥川龍之介に言及する際、まず誰もが彼を小説家だと連想するのは言うまでもない。しかし、芥川は小説家である他に、漢学者でもあり、漢詩も創作していたことはそれほど知られていない。その師である夏目漱石は漢詩集に収録される（208 首）漢詩における才能でも広く知れ渡っているが、芥川の場合は恐らく友人などへの書簡に添えたり友人の依頼で画に題したりする程度の数の漢詩しか作っていなかったためであろうか、漢詩の研究はあまりなされていないのが事実である。

台湾と中国大陸における芥川龍之介研究といえば、とりわけ芥川文学と中国文学との比較や中国の受容などの方面に集中して研究がなされている。例えば、中国大陸では王向遠[1]、王暁平[2]、于長敏[3]、単援朝[4]、邱雅芬[5]、張蕾[6]など、台湾では彭春陽[7]、管美燕[8]、王繡線[9]な

---

[1] 王向遠は芥川と中国との研究の先駆者と言われる。王向遠「芥川龍之介と中国現代文学——ある奇妙な受容現象の分析」『国外文学』1998.1、北京大学

[2] 王暁平は芥川文学の中国受容について優れた論がある。王暁平「芥川龍之介と中国文学」『近代日中文学交流史稿』1987.12、湖南文芸出版社

[3] 于長敏は文学作品における中国の扱い方は客観的だと高く評価されている。于長敏「芥川龍之介の『支那遊記』について」『外国語言文学論集』1986、吉林大学出版社

[4] 単援朝は芥川文学における中国文学の受容について大きな研究成果をあげている。単援朝「芥川龍之介・仙人の系譜—「仙人」「黄梁夢」「杜子春」—」『稿本近代文学』第 17 集、1992、筑波大学／単援朝「芥川龍之介『支那游記』の世界—夢想と現実の間—」『国語と国文学』1991 年 9 月号、東京大学国語国文学会／単援朝「芥川龍之介と胡適—北京体験の一側面—」『国文学言語と文芸』1991.8、国文学言語と文芸の会

[5] 張蕾『芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡——』2007.4、国書刊行会

[6] 邱雅芬『芥川龍之介の中国—神話と現実—』2010.3、有限会社花書院

[7] 彭春陽「芥川龍之介三題——「秋山図」・芥川と章炳麟・胡適との出会い——」

臺灣大學學術期刊資料庫

どの研究者を挙げることが出来る。しかし、これらは大半中国の古典文学の受容といった視点による研究である。しかも、これらの研究者のうち、芥川の漢詩を研究したのは彭春陽と邱雅芬の二人にとどまっている[10]。

台湾人研究者である彭春陽には、(1)「春寒未開早梅枝／幽竹蕭々垂小池／新歳不来書幌下／焚香謝客推敲詩」、(2)「春寒未発早梅枝／幽竹蕭々匝小池／新歳不来書幌下／焚香謝客独敲詩」、(3)「簷戸蕭々修竹遮／寒梅斜隔碧窓紗／幽興一夜書帷下／静読陶詩落燭花」、(4)「／石鼎火紅茶靄軽／月到紙窓梅影上／陶詩読罷道心清」と、梅を題材とする初期の四首の漢詩[11]に絞って、中国の梅の故事や古典をなぞっている点を論考した研究がある。氏は、「彼の初期の漢詩は「梅」を中心に膨らませたものであると言ってよい。(中略)「梅花」といえば、芥川龍之介はすぐ中国の文人趣味を思い出す。漢詩を書くのには、必ず中国的なものを書かなければならない

(『淡江日本論叢』7 輯、1998.3、淡江大学日本研究所日本語文学系／彭春陽「「秋山図」論――芥川の芸術観」(『芥川文学と中国』1998.1、大新書局)

[8] 管美燕「芥川龍之介の「偸盗」における母性的世界―阿濃を中心として―」『淡江日本論叢』4 輯、1993.11、淡江大学日本研究所日本語文学系／管美燕「芥川龍之介における自分自身の救済―「羅生門」を中心として―」『淡江日本論叢』14 輯、2006.12、淡江大学日本研究所日本語文学系

[9] 王繡線『芥川龍之介の児童文学についての研究』2010(学位論文)

[10] 管見では芥川の漢詩についての日本人研究者は村田秀明と小室善弘しか挙げられない。小室は芥川の漢詩を細かく論じているが、34 首の三分の一しか言及しておらず、その論証対象となる漢詩の選択基準は掴めにくい。(村田秀明「芥川龍之介の漢詩研究」『方位』第 7 号、1984.3、熊本近代文学研究会／小室善弘『芥川龍之介の詩歌』2000.8、本阿弥書店)

[11] その四首の漢詩のうち、(1)「春寒未開早梅枝／幽竹蕭々垂小池／新歳不来書幌下／焚香謝客推敲詩」(明治 45 年 1 月 1 日山本喜誉司宛)と(2)「春寒未発早梅枝／幽竹蕭々匝小池／新歳不来書幌下／焚香謝客独敲詩」(明治 45 年 1 月 1 日)を別々の二首の漢詩と数えている。しかし、宛先が違っているが、同じ日に送った作品、しかも「未開」→「未発」、「垂小池」→「匝小池」、「書幌」→「書幌」、「推敲」→「独敲」などのように、それぞれの句に一文字の推敲程度の改稿に過ぎない状況では、同じ詩と看做すべきであろう。よって、厳密に言えば氏のこの論文では三首の詩しか取り上げていない。

臺灣大學學術期刊資料庫

と芥川龍之介は考えていたのであろう。」[12]と、芥川の梅嗜好に言及し、中国文人の影響を受けた芥川の文人趣味を論証している。

一方、中国人研究者邱雅芬は、現存している芥川の漢詩 34 首[13] をそれぞれの詩の用語に注を付けたり、現代語に訳したり、下敷きと思われる中国の古典を挙げたりして、中国文学との関連においての研究では最も完全なものと看做せよう。氏は研究の便を図り、それぞれの創作時期順に番号をつけ、次のように四期に分けている。

第一期：1912 年～1915 年を初期としている。つまり第一高等学校在学中の時から「羅生門」創作までの間、1 番詩から 11 番詩までの 11 首がこれに当たる。

第二期：1917 年～1919 年の二年位の間を指している。12 番詩から 17 番詩まで計六首がある。この頃は時期的には作家としての地位が確立され、小説創作に追われる日々であったため、漢詩作りは憧れの中国文人世界に「安息場」を求める息抜きとしての心情が詩に反映されている。

第三期：中国旅行前の 1920（大正９）年までの短い期間であり、18 番詩から 30 番詩まで計 13 首がある。

第四期：中国旅行以降の長い期間を指しているが、31 番詩から 34 番詩までの計四首しかない。[14]

以上の分類や統計から、四つの時期のうち、最も期間が短い第三期は作品総数の 40%近くを占めており、一方、時間的には最も長い第 4 期は逆に 12%弱しか占めていないという結果は意味深い。と言うのも、氏の研究にも言及されたが、芥川の中国旅行を一つの分岐点と見なすことができ、その前後で漢詩創作量も作風も大きく変わったことが伺える。それぞれの作風の特徴を把握できることは、つまり芥川の中にある中国憧憬の本質、またその変容もつかむことができるといえよう。更には芥川の芸術観にもつながるだろう。以下

---

[12] 彭春陽「芥川龍之介の中国詩画観」『芥川文学と中国』1998.1、大新書局、P28

[13] 村田秀明が芥川の漢詩総数を 32 首としている。本稿は最も数の整っている邱雅芬の集計に従う。

[14] 邱雅芬『芥川龍之介の中国―神話と現実―』2010.3、有限会社花書、pp.161.162

臺灣大學學術期刊資料庫

は、芥川の第三期と第四期の漢詩の傾向や本質、またその変容に焦点を絞って考察していく。

二、第三期の漢詩にみる中国への憧憬

前述したとおり、芥川の漢詩の第三期は 1919 年～中国旅行直前の 1920 年までの短い期間である。その第三期の漢詩には如何なる特徴が見出せるのか、詩に詠われるモチーフ、心情などを次に掲げ、分析してみよう。なお、表記の便宜上、邱雅芬の研究を参考し、詩の前に番号をつけておく。

――――――――――――――――――――――――――――――――

(18)我鬼先生枯坐処／松風明月共蒼蒼／
　何知老魔窺禅室／一夜乍来脂粉香　　――禪・文人趣味

(19)簾外松花落／几前茶靄軽／
　明窓無一事／幽客午眠成[15]　　――閑静[16]・文人趣味

(20) 題空竹居士画竹
　水辺幽石竹幾（三）竿[17]／細葉疎枝帯嫩寒／
　唯恐新（怕清・恐清）秋明月夜／無端紙上露団々
　　――閑静・文人趣味

(21)寂兮舞雩路／亞柯与風薤／
　頽兮恩顧士／黄雲呼鴟哉　　――諧謔[18]

---

[15] この詩は閑静な雰囲気及び文人趣味が漂っている点では、夏目漱石の漢詩集 113 番の「獨坐聽啼鳥　關門謝世嘩　南窓無一事　閑寫水仙花」閑来無一事」という題画詩を彷彿とさせる。(『漱石全集』18 巻、1995.10、岩波書店、P300

[16] 小室善弘によれば、「文面で見ると執筆中の近況のようだが、終わったあとの安堵の心境とも読める。前半閑雅の境を、後半の結句で、さらりと昼寝に転じ、少しアイロニックな味を出しているのも気がきいている。」と、閑静の雰囲気が詠われている。(小室善弘『芥川龍之介の詩歌』2000.8、本阿弥書店、P268)

[17] 池崎忠孝宛のは「幾竿」が「三竿」に、「唯恐新」が「唯怕清」に、そして、下島勲宛の書簡になると、「唯恐新」が「唯恐清」に、と推敲を重ね、表現を変えている。以下推敲によって表現が異なる箇所は同様に表記する。

[18] 首聯には寂寥という心境が詠われているが、「つまり、この古詩は戯詩ということである。」という、村田秀明の捉え方に従えば、諧謔と捉えてよかろう。「芥川龍之介の漢詩研究」『方位』第 7 号、1984.3、熊本近代文学研究会、P146

臺灣大學學術期刊資料庫

(22) 春陰

似雨非晴幽意加／軽寒如水入窓紗／室中永昼香煙冷／
簷角雲容（陰雲・重雲）簾影斜／静処有（案有新）詩三碗酒／
閑時無（牀無残）夢一甌茶／春愁今日寄何処／古瓦楼頭数朶花
——閑静・文人趣味

(23)茅簷帯雨燕泥新／苔砌無人花落頻／
遙憶軽寒鳧水上／長隄楊柳幾条春　——閑静・文人趣味[19]

(24)窮巷売文偏寂寞／寒厨欠酒自清修／
拈豪窓外西風晩／欲写胸中落木秋　——寂寥・悲しみ

(25) 偶成

瑟々侵階月／幽人帯酔看／
知風露何処／欄外竹三竿　——文人趣味

(26) 昨夜帰途得短韻 9／16 小島政二郎宛

十載風流誤一生／愁腸難解酒杯傾／
煙花城裡昏々雨／空対紅裙話旧盟　——愁い・文人趣味

(27) 題倪先生隻鶏之図

明燭似風消慘悽／清香如水滌塵迷／
展将一幅澄心紙／写得中秋白羽鶏　——隠遁

(28) 不負十年未醒名／也対秋風催酒情／
拈筆含杯閑半日／写成荒竹数竿声　——閑静・文人趣味

(29) 山山章同月色／松竹共風烟 ／
石室何寥落／愁人独未眠　——愁い・隠遁

(30) 銅駝名惟在／春風吹棘榛／
陌頭何所見／三五踏青人　——隠遁

————————————————————————————————

大雑把な分類ではあるが、詩のモチーフや詩人の心情、または雰

[19]小室善弘は、「茅屋の軒をけぶらす雨、軒に巣をかける燕の運んでくる泥もぬれてみずみずしい。苔むした庭石を踏んでゆく人もなく、盛りを過ぎた花がしきりに落ちている。と、ここまでは、作者身辺の景。東京田端のわが家の春をまず報じている。次からは、友のいる京都下加茂の地を思いやる心持。」とのように、前半が詩人の回りという現実であり、後半が推測だと述べているが、いずれも閑静、或は文人趣味の雰囲気と見なしてよかろう。(小室善弘『芥川龍之介の詩歌』2000.8、本阿弥書店、P279、280)

臺灣大學學術期刊資料庫

囲気などの項目に分け、13 首の詩を分析した結果、文人趣味と思われるものが最も多く、8 首もあり、この時期の総数の 61%を占めている。次に、閑静な雰囲気として感じられる詩が 5 首あり、40%弱であり、禅及び隠遁と思われるものが 4 首、30%を占めている。そして、諧謔が 1 首にとどまっている。上記の隠遁や禅、文人趣味、閑静、諧謔などいずれもプラスの意味と見なすことが出来よう。一方、マイナスの心境と思われる愁いが 2 首であり、悲哀の心情は 24 番の詩のみであることが明らかになっている。つまり、この時期の漢詩に詠われているのはほとんどが詩人のプラスの心境であると言ってよい。では、このプラスの心境は一体何を意味しているか、果たして漢詩の源である中国につながるだろうかなどの問題を、この時期に友人への書簡の内容を考察することを通して明らかにして見よう。

先ず、例えば大正 9 年（1920）4 月 2 日付下島勲宛の書簡には蘇東坡や劉禹錫、李太白、など中国の詩人の詩を 1 首ずつ引用して友人に送っている事実から、幼い頃より漢詩文などを嗜んでいた芥川の第三の漢詩創作時期には殊に中国の文人を慕う気持ちが強くなっていると見なせよう。また、同じ年に、次のような書簡も見られる。

- 「あなたも画を描いて下すつた故わたしも画をかきましたこれを幽石孤松之図と題します」（7 月 30 日付森幸枝宛）
- 「この頃河童の画を描いてゐたら河童が可愛くなりました故に河童の歌三首作りました　君の画の御礼に僕の画をお目にかけ併せて歌を景物とします」(9 月 22 日付小穴隆一宛)（立っている河童二匹の画である。そして、10 月 21 日にまた小穴隆一に「田端之河童」「本郷之河童」を二枚送った。――引用者）
- 「三四日前晩翠軒へ参り八大山人や王石谷などの画の本を求めました今度御出での節お目にかけます」「ボク目下大雅堂の画を一枚手に入れかかつてゐます」(10 月 30 日付小穴隆一宛）
- 「この頃人に四王呉惲の画集を借りました南田が一番好いやうです今度おめにかけます」（12 月 3 日付小穴隆一宛）

臺灣大學學術期刊資料庫

- 「ボクは今王煙客、王廉州、王石谷、惲南田、董其昌の出現する小説を書いてゐる」（12 月 7 日付小穴隆一宛）（12 月 7 日付佐佐木茂索宛の書簡にも同じ内容が書かれている。――引用者）

以上のように、この時期には、王石谷など中国の画集を集めたり、王石谷や惲南田や董其昌などを主人公とする画論小説『秋山図』[20]を書いたり、更に自ら画を描いたりしている。よく題材にされる河童の画は題材的には中国的とは言いがたいものの、それ以外に、集めた画集も小説の題材も中国関連のものであるのは明白であろう。その他、7 月 30 日付森幸枝宛の書簡に書かれている自作画「幽石孤松之図」が中国画であることは容易に推測出来よう。となると、この芥川漢詩の第三期、つまり一生一度のみの海外旅行である中国旅行に赴く前の時期は中国かぶれ[21]の傾向が見られ、中国に憧憬していた時期と見なしてもよかろう。

上に掲げた芥川の第三期漢詩の統計――61％の文人趣味、40％弱である閑静な雰囲気、及び 30％の禅及び隠遁志向――は、すなわち、芥川の中国への憧憬を物語っている。ところが、その閑静で文人志向の雰囲気の中で、悲しみと寂寥というマイナーなイメージの心境ばかり詠っている詩が 1 首のみある。それが第 24 首「窮巷売文偏寂寞／寒厨欠酒自清修／拈豪窓外西風晩／欲写胸中落木秋」（5 月 11 日付与謝野晶子宛の書簡、また 6 月 3 日付田中貢太郎宛の書簡にも織り込まれている。）である。この詩に嘆いている心境について、小室善弘は次のように語っている。

みずから望んで入った文筆の業も、銭かせぎの手段となれば、

---

[20] 筆者は、芥川の芸術観を探る視点より『秋山図』に関する論文を書いたことがある。「『秋山図』に語られている絵――鑑賞者の位置づけ」《台大日本語文研究 26》、2013.12、台大日文系、P71-94

[21] 芥川が中国旅行に発つ前、大正 10（1921）年 3 月 7 日付恒藤恭宛の書簡には「僕は本月中旬出発三月程支那へ遊びに行つて来る社命だから　貧乏旅行だ」「この頃益東洋趣味にかぶれ印譜を見たり拓本を見たりする癖が出来て困る」と、自分の東洋嗜好に触れたことがある。

臺灣大學學術期刊資料庫

かならずしも自己表現とは一致しない。書きたくないものを書くこともあれば、書きたくないときにも、おのれを鞭打って書かねばならない。何かの折りにそういう自分をかえりみて、むなしい思いがちらと胸をよぎることもあったのだ。「売文」の語にも、そんな索漠とした心境がのぞかれる。[22]

芸術や理想の表現として文筆の業に携われることを楽しんでいたが、いざ誰かに「鞭打」たれるような、書かされるといった状況におかれると、「むなしい思いがちらと胸をよぎる」場合があると詩人として自らの心境を捉えているのである[23]。言い換えれば、詩人が寂しく感じ、悲しんでいるのは「窮巷売文」、及びそれによる「寒厨欠酒」というわが身の状況なのである。「売文」という表現はこの詩の創作時より少し後の書簡にも見受けられる。

- 「その後売文糊口の爲忽忙たる日を送り居り」(10 月 27 付下島勲宛)
- 「この頃売文渡世の忙きに弱つてゐます」(11 月 11 日付小島政二郎宛)
- 「かう忙しいと　聊か小説を書かぬ君が羨ましくもなる　僕も金があると売文糊口なぞはせずに隠逸の志を遂げるのだがな」(12 月 14 日付佐佐木茂索宛)

書簡になると、「売文糊口」「売文渡世」のように、「売文」が手段で、「糊口」(細々とした暮し)「渡世」(生きて行くこと)が目的であるという露骨な表現が用いられるようになるのである。「寒厨欠酒」という程、生活も切り詰めなければならないという現況であるため、詩人は時たま、身の上を悲しく思い、その文学創作を空しく、情なく思うのも容易に想像できよう。そのような状況におかれた芥川の漢詩創作について、「創作活動に全力投球をし、神経をいつもピリピリさせていた。その仕事の合に、彼は漢詩を楽しみ、精神的に多少

[22] 小室善弘『芥川龍之介の詩歌』2000.8、本阿弥書店、P281

[23] 芥川の師である漱石の身にも、そのような状況になるとどこか無人島でも行き、隠遁したい気持ちを吐くのがしばしば見られた。

臺灣大學學術期刊資料庫

なりともバランスをとろうとしていたのである。」[24]という、于長敏の見解のとおり、芥川にとってはこうした漢詩創作は一つの息抜きの場と受け止められる。

のみならず、そこでは、憧憬していた中国という昔の隠遁者世界、中国の文人に接近することができるほか、自分で描いた架空の古き文人の世界に身を浸し、文人情緒を味わうことができたのである。その文人情緒は隠遁志向や閑静な空間、また絵画も含まれると考えられる。上掲した漢詩表には視覚的な詩、つまり絵画のように感じられる作品は番号に網掛けの 6 首がある。20 番と 27 番は題画詩ではっきりした実物の画がついている。それ以外に、19 番は「簾外松花落」という一句で隠者の庵の回りに松の木の画が、23 番は「茅簷帯雨燕泥新」の句と「長隄楊柳幾条春」の句で雨上がりの燕の絵、または川沿いに風に靡いている柳の絵が、それぞれ想像できる。そして、28 番は「写成荒竹数竿声」という句で、29 番は「松竹共風烟」という句でそれぞれ異なる竹の絵が目の前に広がっている。このように、漢詩創作を通して、芥川には絵画性や隠遁性、及び閑静な空間などの文人趣味をたっぷり味わうことが許されたのである。

三、第四期の漢詩に感じられる芥川の心境

芥川の第四期の漢詩は大正 10 年（1921）3 月中旬より三ケ月程の中国旅行以降の長い時期を指している。長い時期に似つかず、この時期には以下の 4 首の漢詩しか創作しなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――

(31)山径誰相問／開窓山色青／
　　山頭雲不見／山際一游亭　　――――隠遁・閑静
(32)買酒窮途哭／誰吟帰去來／
　　故園今泯泯／廃巷暗蛩催　　――――愁い・悲哀
(33)有客來相訪／通名是伏羲／

[24]于長敏「芥川龍之介の漢詩考」『旭川大学紀要』第 33 号、1991.11、P19、20

臺灣大學學術期刊資料庫

泉石烟霞之主／但看花開落 ／
不言人是非与君一夕话／勝読十年書／
夭若有情 天亦老／摇々幽恨難禁／
悲火常焼心曲 ／愁雲頻壓眉間／
書外論文 睡最賢／虚窓夜朗 名月不滅故人／
蔵不得是拙 露不得是醜 ———愁い・悲哀
(34)異花開絕域／滋蔓接清池／
漢使徒空到／神農竟不知 ———空虚[25]

――――――――――――――――――――――――――――――――

4 首のうち、閑静や隠遁と思われるのは 31 番の 1 首しかない。他の 3 首、つまりこの時期の 75%は、いずれも愁いや悲哀、空虚などのマイナーなイメージの作品であり、統計の結果だけでも、第三期のような閑静や隠遁などの文人趣味は薄くなり、また創作数の激減という現象からも中国への憧憬や文人嗜好がかなり冷めたことがうかがえよう。

さて、この 4 首のうち、隠遁と閑静を詠った唯一の作品である 31 番の詩と、はっきりした愁いと悲哀のモチーフの 32 番の詩に注目したい。31 番の詩について、邱雅芬は「ここにもまた例の中国的情緒への憧憬が見られる。」[26]とみなしている。一方、小室善弘は次のように述べている。

平明な措辞で、山地での人物交歓の一場面を構成しているが、これは芥川の好んだ文人画家倪雲林の画の構図を下敷きにしたものではなかろうか。芥川には、雲林の絵の図柄を倣ねた墨画

[25] 邱雅芬は「中国に対する幻想を中国旅行によって破壊された芥川は、愛する田園詩人陶淵明らが生きた時代より、さらに古い漢の時代の中国使者についてゆき、遠い西域で古き美しき夢を求めようとしたのである。しかし、このような精神的な旅も、やはり「漢使」とともにしなければならないところが意味深い。（中略）夢が破れても、なお東洋のエピキュリアンとして、夢のような精神世界を求めずにいられない芥川がのぞかれるのである。」と、この詩の意義を捉えている。文人の象徴である陶淵明など中国の代りに、遠い西域へ夢を求めようとするのは、詩人の中に虚しい、空虚の心境がうかがえよう。
邱雅芬『芥川龍之介の中国―神話と現実―』2010.3、有限会社花書院、P160

[26] 邱雅芬『芥川龍之介の中国―神話と現実―』2010.3、有限会社花書院、P156

臺灣大學學術期刊資料庫

が何点かある。

詩に言うとおりに解せば、山路で誰かが自分を呼んでいる。窓を開けると目の前は青い山、頂には雲ひとつないよい天気。呼んだのは誰かと目をやれば、山のそばに一つののどかな亭が見える、という意。[27]

大正 10（1921）年中国旅行中、書物より得た中国のイメージとは完全に異なった現実にショックを受けた芥川は例えば、「支那ノ風景ハ全然西洋輸入ノ文明ト調和シナイ」[28]、「これは現代支那の洋画なり　日本画でも近頃上海の日本人倶楽部に展覧会を催した支那人あり」「要するに現代支那は芸術的にダメのダメのダメなり」[29]、「僕支那に飽き、この頃敷島の大和心を起す事度々」[30]、「唯今支那各地動乱の兆あり余り愚図々々してゐると、帰れなくなる惧あれば」[31]と、現実の中国に失望した心境を何回も吐露している[32]。勿論、中国への夢が幻滅したとはいえ、中国旅行から帰った後、邱雅芬がいう「中国的情緒への憧憬」というのが完全に消滅したとは言いがたい。しかし、31 番「山径誰相問」という漢詩が織り込まれた大正 11（1922）年 4 月 24 日付小穴隆一宛の書簡と同じ日に出した真野友二郎宛の書簡に「明朝東京発長崎へ遊びに行く所なのです」ということを見落としてはならない。次の 25 日より芥川は 5 月一杯まで東京を離れ、京都を経て長崎旅行をしている。出発直前の芥川は、山々が連綿する九州の風景を想像しながら、中国への憧憬にその心境を重ねて詩を読んだことは推測できよう。となれば、詩の字面とおりに、目の

---

[27] 小室善弘『芥川龍之介の詩歌』2000.8、本阿弥書店、P276

[28] 5 月 16 付小穴隆一宛の書簡の一節である。

[29] 5 月 20 日付小穴隆一宛の書簡の一節である。

[30] 6 月 6 日付小穴隆一宛の書簡の一節である。

[31] 6 月 14 日付芥川道章宛の書簡の一節である。

[32] 他に、5 月に送った宛名不明の書簡に「この地の感じは支那と云ふより西洋だ　しかも下品なる西洋だね　僕の今坐つてゐる料理屋にも日本人の客は僕一人あとは皆西洋人だ　壁上の英国の皇后陛下の写真がそれを愉快さうに見下してゐる」と、本来の中国の文化の代りに西洋化された不調和な中国を目にした時の失望した心境を吐露している一節も見られる。

臺灣大學學術期刊資料庫

前に青い山が見える好天気で、誰か自分を呼んでいるのかと見渡したら、長閑な東屋が見えるという、小室の捉え方の方が合理的であり、この詩の写実的な部分も否定できない。すなわち、旅行先である長崎に暫く身を置く気持に中国への憧憬――隠遁者気分――が重っているのである。

さて、32 番の「買酒窮途哭」という詩に詠われているのは如何なる心境であろうか。この漢詩は 1923 年 9 月 21 日の作（高橋竹迷宛未投函の書簡につけられている）と推測されている。この詩の後の「ワタシノウチハ無事デスガ親戚皆焼カレマシタ」という文面より、邱雅芬は「関東大震災に触発されて書かれた作品と判断される」[33]と 、創作の背景や詩人の心境を捉えている。尾聯の「廃巷暗蛩催」からでは、書簡にある「焼カレマシタ」という地震後の廃れた町の様子を指しているとは言えないこともない。しかし、この詩は単なる地震後の写実的な風景及びその心境を詠っているとは思えない。ここでは第三期の唯一の寂寥と悲哀を詠った暗い詩、24 番の「窮巷売文偏寂寞／寒厨欠酒自清修／拈豪窓外西風晩／欲写胸中落木秋」を想起せずにはいられない。酒を飲みたい詩人が、それを買う金がない程貧しい状況に陥っている点で両者が一致している。邱氏の「関東大震災に触発された」説に従うなら、32 番の詩に詠われている悲しみは家屋が焼かれてしまったことや東京が廃れた町になったことによるものである。しかし、次の焼かれた東京についての芥川の心境が語られる文に注目してみよう。

> （A）水木京太氏などは銀座を通ると、ぽろぽろ涙が出たさうであります。(尤も全然センティメンタルな気もちなしにと云ふ断り書があるのですが）けれども僕は「落つる涙は」と云ふ気がしたふり、実際は涙を落とさずにすみました。その外不謹慎の言葉かもしれませんが、ちょいともの珍しかつたことも事実であります。[34]

---

[33] 邱雅芬『芥川龍之介の中国―神話と現実―』2010.3、有限会社花書院、P156

[34] 「廃都東京」『芥川龍之介全集』第十巻、P160

臺灣大學學術期刊資料庫

（B）災害の大きかつただけにこんどの大地震は、我我作家の心にも大きな動揺を与へた。（中略）すると我我自身の内部に、何か楽みを求めるだらう。すくなくとも、さういふ傾向の人は更にそれを強めるであらう。つまり、乱世に出合つた支那の詩人などの隠棲の風流を楽しんだと似たことが起りさうに思ふのである。これも事実として予言は出来ぬが、可能性はずゐぶんありさうに思ふ。[35]

（A）は元来加藤武雄の依頼で東京を弔う文を作る予定だったが、二枚ほどの書簡の形になってしまった。焼けた東京の風景に「ぽろぽろ涙が出」そうな友人もいたが、自分は「涙を落とさずに」、「珍しかつたこと」などの表現から、芥川には 32 番の詩にあるほどの悲しい気持ちを抱いてはいなかったと推測できよう。一方、（B）に挙げている「震災の文芸に与ふる影響」という文の中で、大きな災害を目の前にしている状況の下で「自身の内部に」「支那の詩人などの隠棲の風流を楽し」んだりする作家もいると語っている。芥川自身もその一人であることは十分に考えられる。但し、大正 11 年の中国旅行中、目にしたその現実によって中国的な憧憬が幻滅したため、32 番の詩では、昔南画だったような空間がすっかり廃れた町になったり、「故園」であった中国が「風景ハ全然西洋輸入ノ文明ト調和シナイ」殺風景な汚い都会に変わった、その変貌を悲しむ心境が抑えきれず、「隠棲の風流」に取って代わったのではなかろうか。そのような悲惨な状況に陥っている「故園」を目の前にして、「帰去来」などのような風雅――中国的な憧憬――を誰が吟味していられようか、というのが詩人の心の深層にある心情で、酒を買う余裕も無いこのわが身の貧しさに託して訴えたのであろう。ところが、中国旅行前の 24 番「窮巷売文偏寂寞」という詩も同じく台所に酒が切れている貧乏な生活をしている詩人の心境を訴えている詩である。が、この「糊口」のために「売文」するというのは詩人芥川が謙遜のつもりでそのような控えめの表現で自分の文学創作を語ったとも捉えられ

[35] 「震災の文芸に与ふる影響」『芥川龍之介全集』第十巻、P162

臺灣大學學術期刊資料庫

よう。酒は切れているが、「自清修」という自律の精神でその状況を乗り切ろうに励みながら、文筆を走らせ続けるのである。ちょっぴり寂しいが、文筆の業を続けられるのは一種の誇りの吐露とも見なすことができよう。一方、32 番の方はそれまで抱いていた憧憬が裏切られたようなものであり、その悲しみは抑えきれずとうとう慟哭せずにはいられなかったのである。よって両者の悲しみの内質が極めて異なるのは明らかであろう。

四、結び

中国旅行後、執筆した旅行記の一つ「長江游記」[36]には「支那には厭き厭きしてしまつた」と語り、また、李鴻章の別荘だった料理屋で御馳走になった後、その夜西村の社宅唐家花園で現代中国について、次のように語っている。

現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉く堕落してゐるではないか？殊に芸術となつた日には、嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？しかも国民は老若を問はず、太平楽ばかり唱へてゐる。（中略）私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なほ支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリストか、浅薄なる支那趣味の愉悦者でもあらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。[37]

このように、現代中国の現実――西洋化した不調和な中国――を目の当たりにし、それまでの書物で得た中国像、中国的な憧憬が幻滅してしまった心境を芥川は吐露している。中国旅行を一つの境と

---

[36] 「僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。それから日本へ帰つた後、「上海游記」や「江南游記」を一日に一回づつ執筆した。「長江游記」も「江南游記」の後にやはり一日に一回づつ執筆しかけた未成品である。」（「支那游記」自序）『芥川龍之介全集』第十三巻、P105

[37] 「長江游記」『芥川龍之介全集』第十一巻、P254

臺灣大學學術期刊資料庫

し、芥川の中国へのイメージがすっかり変わってしまったとよく思われる。小稿では中国旅行にいく直前の第三期の漢詩及び、旅行以降の第四期の漢詩には、芥川の中国像がどのように反映されているのか、また中国旅行後の中国への心境が如何に漢詩に表現されているのか、という問題に注目しながら考察してきた。結果、以下のような結論にまとめることができる。

（一）文人的情緒——中国的憧憬——である漢詩

芥川の第三期の漢詩時期は四つの時期のうち、尤も時間が短いにもかかわらず、創作数が尤も多く、また大半のモチーフが閑静や隠遁、禅など文人の象徴であることは明らかである 。一方では絵画性の高い作品も少なくなく、いずれも閑静的な隠遁世界につながる雰囲気の作品ばかりである。こうした漢詩創作の量的、或いは質的な面から考えても、芥川の中にある中国は、すなわち南画に描かれている閑静で芸術性の高い、また隠遁や禅につながる文人世界の象徴、そのものだと言えよう。それを第三期の漢詩にはよく反映されている。このように、漢詩創作を通して、芥川はそこで憧憬していた中国という昔の隠遁者世界、中国の文人に接近することができるほか、自分で築いた架空の古き文人の世界に身を浸し、絵画性や隠遁性、及び閑静な空間などの文人趣味をたっぷり味わうことが許されたのである。しかし、中国旅行でその中国への憧憬が幻滅してしまったのである。

（二）中国憧憬の幻滅である漢詩

中国旅行後、現代的な中国に目が覚めた芥川は、漢詩の創作に背を向けた姿勢で中国憧憬への幻滅した悲しさを示すほか、漢詩の作風をも変えた。それまで中国＝漢詩＝閑静な隠遁世界というイメージとは打って変わって、「悲火」・「愁雲」・「窮途哭」のような激しい表現や、「故園」の廃れなど心象風景の暗喩で漢詩を創作するようになったのである。殊に 32 番「買酒窮途哭／誰吟帰去來／故園今泯泯／廃巷暗蛩催」に感じられるのは、書物で認識した「故園」の面影は何処にも見当たらないという、裏切られた最も痛ましい心境であ

臺灣大學學術期刊資料庫

ろう。

この裏切られたような悲哀は、所詮芥川の盲目的な中国的憧憬から招いたものとしか言いようがない。近代中国に関する情報を芥川は様々なルートから多少摑んでいたはずである。例えば、出発する前、その送別会の席上で「里見淳講演して曰く「支那人は昔偉かつた　その偉い支那人が今急に偉くなくなると云ふ事はどうしても考えられぬ　支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ」と　私もその心算でゐるのです」と、里見淳が中国の現状について改めて注意していた。芥川も心構えていると言いながら、その中国的憧憬があまりにも深いものだったため、その衝撃のダメージが激しかったのであろう。

テキスト

『芥川龍之介全集』2007.1－2008.12 岩波書店
『漱石全集』18 巻、1995.10 岩波書店

参考文献

于長敏（1986）「芥川龍之介の『支那遊記』について」『外国語言文学論集』吉林大学出版社
于長敏（1991）『芥川龍之介の漢詩考』』旭川大学紀要第 33 号
王曉平（1987.12）「芥川龍之介と中国文学」『近代日中文学交流史稿』湖南文芸出版社
王向遠（1998.1）「芥川龍之介と中国現代文学――ある奇妙な受容現象の分析」『国外文学』北京大学
邱雅芬（2010.3）『芥川龍之介の中国―神話と現実―』有限会社花書院
管美燕（1993.11）「芥川龍之介の「偸盗」における母性的世界―阿濃を中心として―」『淡江日本論叢』4 輯
管美燕（2006.12）「芥川龍之介における自分自身の救済―「羅生門」を中心として―」『淡江日本論叢』14 輯

臺灣大學學術期刊資料庫

小室善弘（2000.8）『芥川龍之介の詩歌』本阿弥書店

単援朝（1991）「芥川龍之介『支那游記』の世界―夢想と現実の間―」『国語と国文学』東京大学国語国文学会 1991 年 9 月号

単援朝（1991.8）「芥川龍之介と胡適―北京体験の一側面―」『国文学言語と文芸』国文学言語と文芸の会

単援朝（1992）「芥川龍之介・仙人の系譜―「仙人」「黄梁夢」「杜子春」―」『稿本近代文学』第 17 集、筑波大学

張蕾（2007.4）『芥川龍之介と中国――受容と変容の軌跡――』国書刊行会

范淑文（2013.12）「『秋山図』に語られている絵――鑑賞者の位置づけ」《台大日本語文研究 26》台大日文系

彭春陽（1998.1）「「秋山図」論――芥川の芸術観」『芥川文学と中国』大新書局

彭春陽（1998.3）「芥川龍之介三題――「秋山図」・芥川と章炳麟・胡適との出会い――」『淡江日本論叢』7 輯淡江大学日本研究所日本語文学系

村田秀明（1984.3）「芥川龍之介の漢詩研究」『方位』第 7 号熊本近代文学研究会

臺灣大學學術期刊資料庫